

60周年によせて — あれから10年、されど60年 — …

牧野 鐵 五 郎

1986年(昭和61年)の50周年記念式典当日、深い海から湧き上る怒濤の響きにも似た歓喜のどよめき、端麗な姿で会場を圧する ASK-23 “AION II” の勇姿、全国から馳せ参じた数多くの OB 達が、互いに肩を組み、ホホを赤らめて声高らかにカレッチ・ソングを歌い上げた50周年記念の宴。晴れの舞台の壇上にある人、会場にいる人すべてがスターであり、主役であり、そこには脇役はいなかった。

あれから10年……思えば60年前、大空に新しくまたいた4つの新星(尾田、牧野(伊)、竹内、橋本の大先輩達)は、今や航空部60年の輝かしい歴史と伝統という堅い絆^{キズナ}に結ばれた300名を越す大星雲の OB 会にまで発展した。

この半世紀を越え、60年にわたる同志社大学航空部の発展の歴史は、とりもなおさず日本の学生航空発展の歴史とオーバーラップする成果といっても過言ではない。

我々はこの事実到大なる自信と誇りをもつべきであるが、同時に我々はいたずらに過去の歴史と成果に溺れることなく、今年迎えた60周年を、次なる70周年、80周年、更には100周年に向けての道程、20世紀から21世紀への懸け橋の出発点であると位置づけ、将来に期待される奮闘、発展、成果の原点にならねばならないと自戒するものである。

単に時間の経過の長さが歴史を形成するものでもなければ、伝統を育むものでもない。そこには常にキラリと輝く過程があり、自信をもって次の世代に語り継がれる結果があつてこそ、伝統といい、歴史という文化がうまれるのではなからうか。

手をこまねいては輝ける歴史と伝統の発展、継承は望めない。方策につまづき、発展に陰りが見え、打開策に窮したときは、迷わず虚心担懐に原点に戻り、60年前僅か4名で船出した航空部が

今の隆盛をみるまでの素晴らしい過程を振り返り、明日への方策樹立の基礎としたいものである。

あれから10年……50周年式典の年、現役主将として部員の統卒に当たっていたのが現航空部監督の新庄博志氏である。我々はこの目に見える具体的な時の流れをいかに的確にとらえ、いかに具体的に誌面に形成させるかがこの60周年誌の1つの大きな目的である。

今この10年間を振り返ってみると、50周年を期に更なる大飛躍を誰しもが熱望したのであるが、結果はこれに反しその期待を大きく裏切った。これは我々が50周年の成果に甘え、その栄養に甘えて過した結果にはかならない。

現役学生の部活しかり、機体に関してもしかり、更に翔友会の運営においても又しかりである……入部部員の減少に始まり、同立戦6連敗、全国大会予選敗退、加えて事故多発。新機体購入計画ゼロの10年。翔友会もまた多くの問題を抱えて過した10年であった。

我々はこの現実から目をそらせることなく、いかにすればこの停滞から脱却し、いかにすれば次の発展に繋ぎうるかをこの60年誌を通じて全 OB の諸兄に問いかけたい。

60年誌を編纂するに当って、改めて50年誌を読み返してみると、そこには実に数多くの歴史的資料、その時代、時代を力一杯活動し続けた先輩達

の生の記録が、もの見事に集約され、50年の全てを我々の目の前に展開してくれている。

60年誌もこの航空部の歴史を、部員の活動を、資料の継続をここで途切れさせることなく集約に努め、これによって50年誌に続く歴史の継続を果たし、その成果を次の世代に申し送りたいと考えている。

あれから10年……今や盛大に行われた50周年式典の華やかさを知らない世代がふえている。その人達に航空部の歴史と伝統を形で表現し、その寄りどころになれるよう、そんな60年誌になりたい

と考えている。

航空部と共にある我々は、常に60年にわたる宿命的なエニシによって結ばれその中で活動が続けているのであって、

航空部の歴史を知らずに将来はない。

歴史に励まされて将来は輝く。

そして大いなる飛躍が約束される。

60周年を機に、次なる70周年、80周年、更には100周年に向けて、大いなる発展をここに諸兄と共に誓い合いたいものである。

(昭和19年卒)



50周年記念パーティ会場風景 (写真提供 窪田昌三氏)